

婦人解放運動の先駆者
郷土出身者として――

永鳴暢子の生涯

岩織政美

重心を共有する女

——永嶋暢子と八木秋子——

相 京 範 昭

(八木秋子研究家
「あるはなく」『パシナ』発行者)

からだと宇宙、この「うち」と「そと」の神秘なるものがなによつて構成されているか。古来、中国では「氣」がすべてを往還し、活動していると考えられてきたが、われわれは想像力の本源にそれを感じているのかも知れない。

永嶋暢子と八木秋子。はるかに二人を眺めれば、宇宙における「連星」が思い浮ぶ。広辞苑によれば「各恒星が相互に引力を及ぼし合い、共通重心の周りに公転運動をしている重星」とある。

二人は互いに引きあいながらそれぞれの道を選択し、時には疎ましく思うこともあったろうが、しかし、その共通重心というべきものはあった。もちろん、そうみるのはわたしだけではないだろう。永嶋を「郷土、八戸の先輩として存在したことを人々に伝え、女性史の一ページに加え、位置づけさせる」ことがなすべき仕事だと自らに言い聞かせている。この本の著者、岩織政美氏もそのひとりであるにちがいない。彼は二人の関係を「人間として純粹なあり様、思想を求めつづけた八木秋子が、これほど深い心の絆をもちえた永嶋暢子の生き方、心情には、いささかもケレン味、嘘が介在する余地がなかった純粹なものがつらぬかれている」(『パシナII』永嶋暢子について)としてゐる。

永嶋を氏が五年有余にわたって調査、執筆し、今回このように上梓されたのも、また、わたしは八木秋子の個人通信と三冊の著作集の発行に思い入れたのも、先にあげた共通重心をわたしたちも意識しているからかも知れない。それは何か、ということが当然この小文のテーマであるのだけれども、まず、親友の八木秋子について、若干の素描が必要だろう。

八木秋子。一八九五年(明28)うまれであつて永嶋より学年でいえば一級年長である。出身は長野県木曾福島町。結婚し、男の子をもうけるが、子を置いて家を出る。のちに偶然投稿した文章がきっかけで、東京日々(現在の毎日)新聞の記者となる。その頃、永嶋と出遭い、しだいに社会主義、労働運動、アナキズム運動にかかわつてゆく。一方「女人芸術」などで評論や創作を発表する。昭和五、六年、農村の困窮化に対し、自給自足の農工コミュニティを目指す「農村青年社」の運動を果敢に展開するうちに、昭和七年四月、逮捕される。三年後、その事件がむし返され、治安維持法違反で実刑判決を受ける。出獄後、渡満し、満鉄の「留守宅相談所」の職員として、遠い辺境に赴任する社員の留守宅、母と子の相談に乗る仕事を続ける。そこへ永嶋が頼ってくる。その後、敗戦まで二人の交流はつづく。敗戦の混乱で、八木は引揚列車に添乗せざるを得ず、意志に反して新京へ戻る機会を逸つてしまふ。永嶋との約束、死ぬまでその悔いは残ると、その日記に書いた。東京で、知人から永嶋の死を伝え聞き、死ぬまでその悔いは残ると、その日記に書いた。八木は、引揚者たちの母子寮に勤め、昭和四二年、都下で独居生活に入る。昭和五〇年、わたしは八木秋子と初めて出遭つた。翌年の老人ホーム入りを契機に、八木に協力して個人通信「あるはなく」を発行した。以降、通信一七号と三冊の著作集を刊行。いずれもわ

たしが編集・発行人となり、自主出版したものである。一九八三年（昭58）四月、病死。八七歳。

八木秋子の八七年の生涯のなかで、永嶋との交遊は、およそ三〇歳から五〇歳までである。そのうち満州で過した七年あまりの期間は、特に心から深い友情の絆で結ばれていたといえるだろう。友情の絆、信頼、あるいは先きほどの「共通の重心」は何か、ということと言葉で深すことは困難なことだが、八木秋子の何にわたしが魅力を感じたのかを究明するためにも、親友永嶋暢子を鏡として考えてみたい。

八木秋子が永嶋のことを書き遺したいという意志には並々ならぬものがあつた。彼女は古いノートに「永嶋暢子さんの憶い出」を何度も何度も書き直しているが、脱稿したとはしていない。言い尽されぬままのそれをわたしは原稿用紙に起し、著作集Ⅲ『異境への往還から』の巻頭においた。岩織氏は「八木秋子と永嶋暢子の心の交流・深い絆を類い稀いな内容として感動的に記した真実の文」と絶賛されている。単に、親友との約束を裏切つた慚愧の念からこの文章が生まれたとは思えない。永嶋への信頼の絆は、とりもなおさず、八木自身が保持していた価値観の核心をなすものである。

そこでわたしはその文章をとおして、永嶋のどこに信頼の絆を降したか深ってみたい。昨秋、『パシナⅥ』で、二人から想像する風景、すなわち、二人がどのような風景のなかにいることが最もふさわしいかと書き、満州の奉天駅で再会する場面の描写こそそれにあたるとした。『パシナ』はわたしが発行人となつて年一回出しているが、八木秋子に関係する人たちの投稿で埋められている。その表題であるパシナとは、満鉄の特急「あじあ」

を牽引する蒸気機関車から採つた名である。小冊子『パシナ』発行には、この場面への思入れがイメージされていた。

永嶋さんが着くその日が来た。私は新京を発つて奉天まで迎えに行った。止まった列車の見上げるように高いステップの上に彼女の姿があつた。綿入れの着物、綿入れの羽織に着ぶくれで微笑っている。

「案外変らないね」

「幾星霜というところかね」

ふたりは笑いあつた。永嶋さんはわたしの黒熊のような防寒服の姿を眺めて

「なるほどね、目方が五貫目もあつて、これがそのシューヴァなんだね」とニヤニヤした。

また同じ文章でこうも書く。入社ของキツカケを作つた満鉄の重役に、つい生章氣な言葉を発つてしまふ。それが意外な受けとられ方をして、驚きと失望のうちに、茫然と永嶋を訪ねるくだりである。

永嶋さんはまじまじと私を眺めて

「妙ね、また何かやらかしたんだね」と言つて

「ね、失敗はいいのよ、失望しちゃうだめ。失敗すれば傷つくけど、でも失望した人間よりどんなに幸福か、それで生きてゆくのをよ」

暖い思いが胸に満ちてくる。友情とは何という有難いものであろう。私の臉から涙があふれ落ちた。永島さんは何ひとつ私から聞こうとしなかった。

大陸の乾いた空気にも似た快い会話。たがいに引き合いながらも、もたれあうことのない関係。それぞれの軌跡もあわせて遠く眺めれば、八木秋子の伝えようとした二人の世界は像をむすぶのである。失望という言葉を使わなかったとき、わたしたちは、彼女が渡満する直前、ガス自殺をはかったことを知っている。と同時に、彼女はその孤独な作業を通じて、命をかけて獲得した言葉も残している。すなわち、『輝く』紙上にのせた「大地」の映画評「女阿蘭」のなかで「批判を持つ愛の深さこそ男も女をも生かす原動力の様に思はれる。批判のない所に発展がない」という「批判の精神」である。肯定とは閉じられた宇宙であり、自己に対しても、他者に対しても、常に批判の眼を持ち続けること、それが自律であり、連帯の大原則だといっているのである。

八木秋子は獄中にいたが、その数年前、やはり「輝く」紙上で、同じように自己批判、否定を表白している。農村運動が頓挫したあと、その運動の渦中での「闘い」という意識が傲慢を植えつけていなかったか、その自分は本当に真実だったかと問い直し、孤独な自分と向き合う日々をおして「真実にふれたい」「虐げられた人々とともに生きたい」としている。内省するときをへて、彼女は一度捨てたわが子との同居生活を考え始めたが、運命というべきか、再逮捕されてしまう。また、かつては最愛の同志であった男とも、公判を通じて別れを宣言せざるを得なかった。わが身ひとつ。八木秋子もまた満州へは独りの旅立ちであった。

わたしは、それぞれ二人が修羅場を経て獲得した共通する精神、すなわちその絆は、批判の精神だと思う。八木秋子が友情というとき、永嶋の「批判を持つ愛の深さ」と対応する。批判とは他者の視点をとり込むことである。ありていにいえば、異質な世界との境界までわれわれ自身が往くことだともいえようか。異質なものを日常から排除するとき、われわれは、なんら有効なカードを持たぬまま単機能高度化社会へ突入し、一方、闇は深く侵攻していくのである。

わたしは八木秋子の大きな眼を思い出す。遠く見遣る深い眼差しは、そのすべてをあらわしていた。そして、連星である永嶋暢子もやはり、時を越え、わたしたちを見据え続けているにちがいない。

一九八五年五月、わたしは岩織政美氏を八戸にたずねた。初めての八戸は、ヨシツネもキリストもふところに抱く、大洋に開いた湊であり、ゆつたりとした臥牛山が風景をつくっていた。パシナのカットはすべて、縄文晩期、八戸は川人の豊かな想像力が遺したものである。わたしたちは巡りまわった。永嶋の生地、剣吉の屋敷跡にもたつた。奥まった処には小さな祠がのこっていた。その裏手からはるかに名久井岳がのぞめた。それだけが屹立する秀嶺を前にわたしたちはしばらくたたずんだ。八木秋子と永嶋暢子にひかれた男たちが現在ここにいる。

風は新緑、山吹がひらめく。

一九八七年五月